



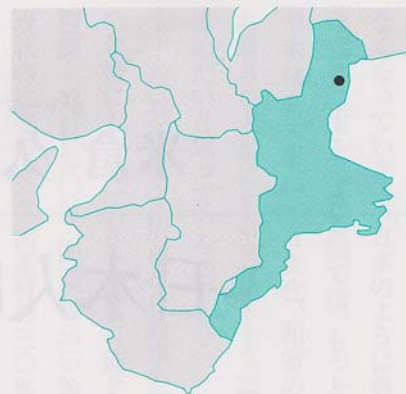
100年先を読みながら

森林施業するNPO

三重県四日市

NPO法人森林の風 事務局長

瀧口 邦夫



「NPOでもつくろうか!」と誰からとなく声が出た。「やってみようか?」と互いに顔を見合わせうなずいたのが始まりである。三重県緑化推進協会が主催する森林ボランティアに参加していた八人が賛同し、「ほかに声をかけてみるか」となった。一週間後には、初代会長の故奥田義巳氏らNPO設立に必要な一〇名が集まり、二〇〇五年、NPO法人「森林の風」がスタートした。

環境保護に関心持つ人たち

集まったメンバーは、都市に住みつつも日頃から環境保護に関心を持っていた面々だ。ボランティア活動に汗を流しつつも、「森を楽しむ」といった活動に徐々に物足りなさを感じていた。

手入れが施されず荒廃していく人工林を目の当たりにし、荒れた森林が保水力を失っていき、災害にもつながっていくことを学んでいくにつれ、「都市に住む自分たちも、もっと積極的に森林再生にかかわっていきたい」と感じ始めていた。

ボランティアから一歩踏み出し、「森林再生を目指す技術フィールド」への進化を目的として立ち上げたのだ。

「危ない!」。大きな叫び声が森にこだました。県民の森での伐採作業。恐る恐るチェーンソーを木にあてるメンバー。その様子をかたずをのんで見守るほかのメンバー。木が倒れる瞬間、どちらの方向に倒れるか予測がつかず、クモの子を散らすようにみんなが逃げまどった。

今となつては笑い話だが、志だけでは森林再生は実現できないことを現場の作業で痛感した。

これではいけないと、林業に関する知識や技術の足りなさを補うために、鈴鹿森林組合が主催する「グリーンワーク研究会」に参加し、技術向上に努めた。その一方で森林法や国定公園法など必要な関連法規を学んでいった。また、「日曜間伐隊」をつくり、森林組合の請負で実践の腕を磨いていた。

最終的には、「作業の安全、マナーとルールを守

る」ことを約束し、故大萱宗治組合長をはじめ鈴鹿森林組合や行政の方々の全面支援の下、結成となったのである。

現在の会員は、会長の蒲田博氏(七六歳)をはじめとする二一名で、うち三名が女性である。定年退職後のリタイヤ組から主婦、さらには現役のサラリーマンまで多彩な面々だ。

年齢別には、七〇歳代二名、六〇歳代一〇名、五〇歳代四名、四〇歳代三名、三〇歳代二名の老若男女だが、全員がチェーンソーを扱えるのが強みだ。

元信州大学農学部教授で「島崎式間伐法」で知られる島崎洋路氏の「KOA島崎森林塾」、三重県が誇る林業家速水亨氏の「速水林業林業塾」など県内外の林業講習にも積極的に参加し、交流を広げていくとともに知見を高めていった。島崎先生が指導する長野県天龍村の女性林業家グループとは、約三分の山林で地拵(しご)えと広葉樹の植林を共同で実践し、現在でも交流が続いている。

設立当時お世話になった三重県緑化推進協会

profile

瀧口 邦夫 たきぐちくにお

1949年奈良県生まれ。サラリーマン時代は新聞社で写真印刷業務に携り、東京、大阪、名古屋を転勤。趣味の登山で荒廃した山を見て、森林ボランティアに参加。その後、次第に林業にはまり、2004年に脱サラ。翌05年に仲間10名とNPO法人「森林の風」を結成し事務局長に就任。妻の朱実さんも森林の風のメンバー。【NPO森林の風事務局】〒512-0933三重県四日市市三滝台4-15-7 E-mail: ktaki@m3.cty-net.ne.jp HP: http://www.morinokaze.info/ 2010年12月現在、会員募集停止中。

NPO法人 森林の風

会長 蒲田 博(1934年京都府生まれ) 2005年森林施業グループ「森林の風」として結成し、同年NPO法人認可。同年12月本田技研工業株式会社と森林保全活動支援契約。06年「まちの木こり人育成講座」開講。08年冊子「水源の森プログラム 光・土・水・風」を編集。同年農林水産省「立ち上がる農山漁村」に選定。09年三重銀行と森林保全活動契約。同年「三重県環境活動賞」受賞。10年NTN株式会社と「三重県企業の森」支援パートナー契約。同年水源の森プログラム「森を測る」「実践!まちの木こり人」「基礎編まちの木こり人」を編集。

の事務長で、現在は中勢森林組合組合長の水井悦雄氏からは、「数字の計算ができるNPOであれ」と教わった。この教えを受け、経費管理だけではなく、森林調査や測量技術なども身につけていった。木の成長を考え、森林密度などを計算した上で、計画的な施業が求められるからだ。

木こり人育成講座開講

翌〇六年からは、「森林の風」主催による「まちの木こり人育成講座」を開講した。会員各自が得意分野で企画運営に協力し、人に教えることによって、会員個々の知識・技術も確かなものとなっていた。セミプロ集団への足固めができたといえる。

〇八年には、その成果を冊子「水源の森プロゲ

ラム 光・土・水・風」にとりまとめ発行し、「まちの木こり人育成講座」の教科書として使えるようにした。

さらに、一〇年には、「森を測る」基礎編「まちの木こり人」「実践!まちの木こり人」の三冊を発行した。森林施業に取り組む者が、それぞれのステージ、目的に応じて使い分けられるよう、あえて三分冊に編集したものだ。

執筆は、会員各自が得意分野を受け持ち、現時点での「森林の風」の知識とノウハウの集大成といえるものとなっている。「まちの木こり人育成講座」の教科書としてだけでなく、森林再生に熱い思いのあるグループや個人にも配布し、多くの方が森林にかかわってもらえればと期待している。



育成講座で伐木練習後の切り株を見て説明中

講座の受講生から新たに「森林の風」の会員になった者も多いが、単なるボランティア志向や健康維持目的だけで参加した者は、その後徐々に会から去っていった。

この「まちの木こり人育成講座」は、現在も続けており、団塊世代を中心にした森林講座を年二〇回程度開催している。

六年目を迎える一一年は、受講者が森林施業を学びながら一杉の山林を整備することを計画している。

こうした活動を通じて、会員それぞれが、地拵え・植樹・間伐・枝打ちと多くの技能を高めていった。そして、森林組合や森林所有者などからの作業請負に取り組んでいくこととなる。

とはいえ、最初の作業請負では、参加人数と費用の計算をすると日当二〇〇〇円にしかならず、一同苦笑いのスタートであった。

意外に早く飛躍チャンス

「森林の風」にとって、飛躍するチャンスは意外にも早く訪れた。NPO法人立ち上げとほぼ同じタイミングで、三重県鈴鹿市に工場がある本田技研工業株式会社(以下ホンダ)から、三重県内の植林活動で協力してほしいとの相談が舞い込んだのだ。

ホンダは全国各地の事業所で、地域の「水源の森」を守り、育てる活動を行っている。鈴鹿工場の従業員やOBとその家族がボランティアとして、植林や除伐、間伐作業に参加できるよう、森林保全活動をサポートしてほしいとの申し出があった。

NPO法人としての地位固めをする上で、当方

としても願ってもない申し出だった。早速、ホンダと鈴鹿森林組合、「森林の風」の間で森林保全活動支援契約を締結し、今では、森林組合が所有する亀山市内の約九分の山林でホンダの皆さんと手入れを続けている。

○九年には三重銀行との協働で「みえぎん まなびの森」を孤野町内にオープンした。これは地域の子どもたちが、木々の観察や工作教室の体験を通じて、森林や環境の保全に関心を持つってもらうことを目的として整備したものだ。

観察林エリアと育樹エリア、体験広場からなり、雑木林を整備して、葉樹などさまざまな種類の見本林を植樹し、工作などの体験スペース、木を使った遊具施設などを整備するとともに、管理・運営を委託されている。

この「みえぎん まなびの森」は、現在「森林の風」の活動拠点にもなっている。

また、一〇年には大手精密機器メーカーのNTN株式会社と桑名市において「NTNこもればの森」での協働がスタートし、四・五分の森林管理を委託されている。

こうした「企業の森」への参画に加え、三重県内各地で地権者などとの長期契約に基づく森林施業を展開中で、現在施業進行中の森林面積は四〇分となつている。NPOらしい施業として、伐採した木は必ず横に寝かせて積み上げる工夫をしている。これによって、土壌の流出を防ぐことができるからだ。

結成後わずか六年弱の間で、これほど多くの森林施業にかかわることができたのは、会員の皆さんの熱意と努力に尽きるといえよう。

年々被害が深刻化する鹿害対策にも積極的に取り組んできた。安いコストと少ない労力でできる鹿害対策をいくつか試したところ、ポリエチレンテープを樹木にらせん状に巻く方法、枝打ちした枝や割った竹を幹に巻きつける方法で一定の効果が見れた。

その一方で、使用済の養殖用ノリ網を幹に巻きつける方法は、ノリ網が鹿に見事に破られたりして失敗だった。鹿に樹皮をはがされた木は、やがて枯れてしまう。これからもいろいろな方法で鹿害対策を模索していくつもりだ。

森林施業にデータ管理も

森林施業での経験の少なさを補うにはデータ管理が重要だ。現在、施業地の定点観測を進めているが、管理方法が難しく、試行錯誤を繰り返しているのが現状だ。鹿害対策に加え、定点観測の取り組みも、よりプロフェッショナルに近づくために注力していきたいと考えている。

ちなみに、このような取り組みが評判を呼び、各自自治体が開催するイベントへの参加や小・中学校の森林体験教室の指導への要請が増えてきている。小・中学校からの要請には無条件で応えているものの、最近、イベントへの参加は一過性なものに過ぎないのではないかと感じてきている。森林を守るための啓蒙活動は、イベントの開催だけではなく、森林施業の実践と並行した活動でないと意味がないのではないか。

最後に、「森林の風」のこれからの活動について紹介しよう。

その一つが、竹ポット植樹の展開だ。「企業の森」

での活動などを通じ、これまで多くの方々から森林再生に取り組んでもらってきた。しかし、より多くの方に森林再生に参加してもらおう方法を検討した結果、竹ポットによる育樹が手軽で有効であると考えている。

ガレ場になった場所でテスト植樹をしたところ、活着率がよく、植樹に効果的であることがわかった。竹は二〜三年すると腐って分解し土に還るので環境にも問題がない。竹ポットづくりやドングリ拾いは、児童の育樹体験にもなるほか、山に入るができない高齢者や障害者にも森林活動への参加が可能となる。ぜひ、広めていきたい。

何とか作業にふさわしい対価を

また、これまで会員には交通費程度の日当しか支払えなかったが、作業にふさわしい対価を支払えるNPO活動にしていきたい。このことは、組織や事業が存続し、次の若い世代に引き継いでいく上でも不可欠であると考えている。

そのためには、一〇〇分以上の山林の施業にかかわればと思う。国有林や県有林の施業請負の門をNPOにもぜひ開いてほしいものだ。

これまで、荒れ果てた森林を再生したいとの思いで取り組んできた。自分たちが間伐した森林に入り、日光が明るく差し込み、木々の間を鳥が飛び交う光景を目の当たりにすると、豊かな森林を未来に残すための情熱がまたふつふつとわいてくる。

一〇〇年前のことを考え、一〇〇年先をよみながら施業をする。そんなNPOであり続けた。